



みどりの風

令和4年11月1日発行
校報 601号
(みどりの風 144号)
練馬区立関町北小学校

命の話

校長 吉川 文章

11月のふれあい月間にあわせて、全校朝会で「命の話」をしています。ご家庭でも話題にしていだければ幸いです。

今から、30年以上前のことです。私は、学校の先生になる前で、お手伝いの先生としてある学校に自転車に乗って通っていました。いつも電車の踏切を通るときに、踏切にお花が供えてあることに気がつきました。お花のそばにかわいらしいウサギのぬいぐるみも置いてあり、「小さな女の子がここで事故でなくなったかな」と思いました。ある時はお菓子が、ある時は花柄のワンピースが供えてありました。踏切を通る度に胸が締め付けられました。小さな命がなくなった悲しみと家族の、特にご両親の辛さを思いました。しばらくして、正式に違う学校の先生となってからは、何年もその踏切を通ることはありませんでした。

それから10数年の月日が過ぎました。小さな子が成人するくらいの長い時間です。わたしは、結婚もして二人の女の子の父親になっていました。学校を転勤することになり、通勤である踏切を通るようになりました。踏切には、何も置いてありませんでした。「お家がお引っ越しされたのかな。長い年月が経ちお父さんやお母さんもずいぶんとお年を取られているので病気にでもなったのかな」と心に何かひっかかる思いで毎日そこを通りました。

1ヶ月ほどしたある日のことです。踏切にお花と、お花のそばにお化粧品道具が供えてあるのを見ました。わたしは、それを見て「小さかった女の子も生きていれば大人になっている頃なのだ」と思い、ご両親のこの20年間の我が子を思う気持ちに胸が引き裂かれるような気持ちになりました。ある日には、おしゃれな靴が、ある日にはお酒が供えてありました。毎日踏切を通る度に、私の二人の娘が元気で育ってくれた喜びに感謝をするとともに、今の学校の子供たちの命を大切にしようという気持ちを強くもつようになりました。

その後、転勤してから、その踏切は通っていません。でも、ご両親は生きている限り、我が子を失った悲しさは変わることなく、お供えを続けておられると思います。

みなさんもそんな大切な命をもっているのです。

ちょうど9年前、わたしが勤めていた学校の6年生が何ヶ月も病気と闘って亡くなりました。足が速く、運動会ではいつもリレーの選手。クラスで困ったことがあると相手の気持ちを考えた発言をする野球が大好きな元気で友達思いの子でした。ご両親は、その子が大好きだった野球場のそばにわざわざお墓を移されました。わたしは、その子の命日の近くには、毎年お線香をあげ手をあわせにお墓を訪ねています。お墓には、「家族」という言葉が大きく刻まれています。そして、たくさんのお花と野球のボールがお供えされています。

みなさんは「命の話」を聞いて何を感じましたか。これからの学校や家庭での生活に生かしていきたいと思うことが「それぞれの心に」芽生えたらいいなと思います。クラスでも感じたことなどを伝えあってみてください。